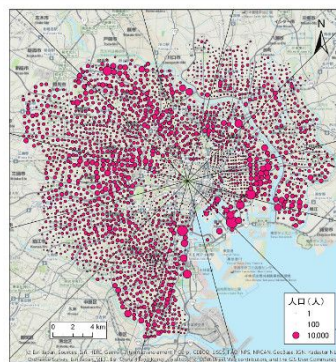
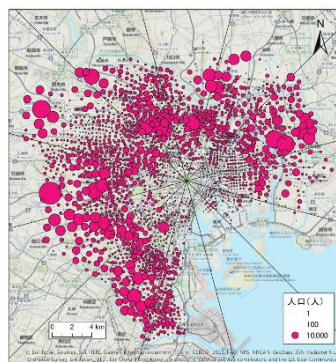
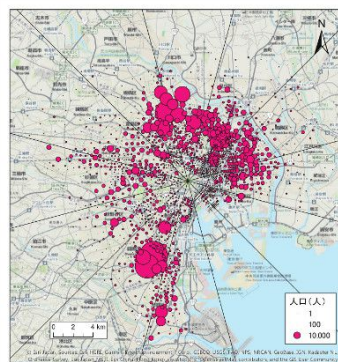
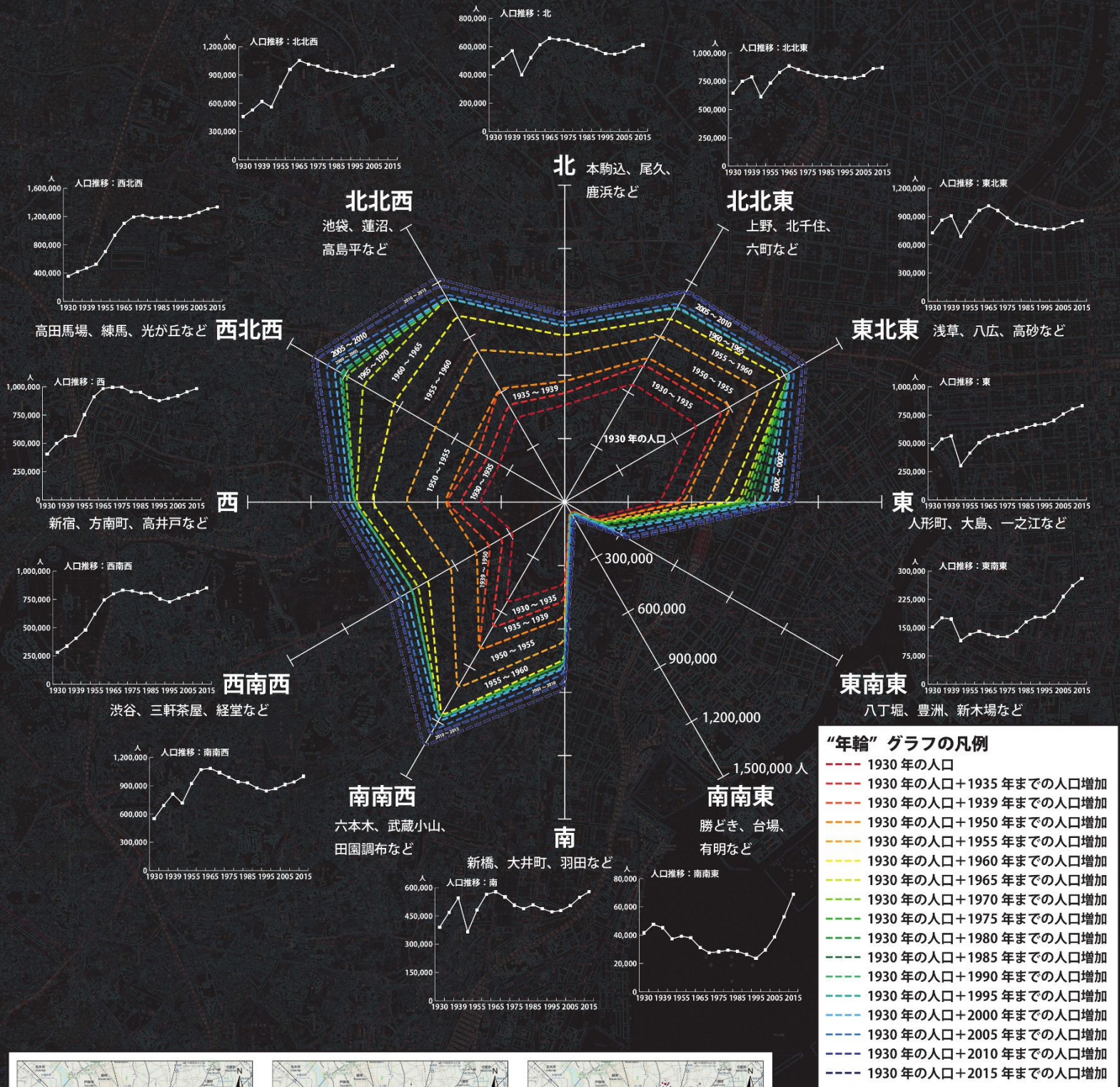


東京はどの方角に成長してきたか

— 1930 年以降の小地域統計からみた人口増加 —

桐村 喬（皇學館大学） t-kirimura@kogakkan-u.ac.jp



町丁・字別人口分布の変化（1930・1965・2015 年）

※1939 年以外の人口は、各年の国勢調査結果によるものであり、1939 年の人口は警視庁による戸口調査の結果によるものである。

なお、1930 年の人口には、砧村・千歳村（現世田谷区）を含んでいない。“年輪”グラフの背景画像は旧 1 万 1 地形図をもとに作成した。

中央の“年輪”グラフは、皇居を中心として東京 23 区を方角別（30 度幅）に区分し、町丁・字別の小地域統計から、1930 年時点の人口に、2015 年までの各時点までの人口増加数を加算して示したものである。なお、人口減少は増加数 0 と考え、グラフを作成した。樹木の年輪と同様に、曲線の間隔が広いほど、その時期に大きく人口が増加したことになる。

戦前の人口分布は北北東・東北東に偏っており、高度成長期までは、北北東・東北東での人口増加が続いた。高度成長期に大きく人口が増加したのは北北西や北北西であり、1970 年代以降、北北西は最も人口が多い方角である。大部分の方角では、1980 年代前後に人口が停滞するが、1990 年代後半以降は、いわゆる「都心回帰」の進展により、人口増加が続いている。特に、人口規模は小さいが、臨海部の東南東、南南東では、1990 年代以降、急速な人口増加を示しており、戦後最初の 23 区内人口のピークであった 1965 年の人口を大きく超えている。